



Data

監督・脚本: ルル・ワン

出演: オークワフィナ/ツイ・マー
/ダイアナ・リン/チャオ・
シュウチェン/ルー・ホン/
ジャン・ヨンポー/チェン・
ハン/水原碧衣/ツァン・ジ
ン/リー・シャン/ヤン・シ
ユエチェン/ジム・リユー

👁️👁️ みどころ

新型コロナウイルス騒動のため公開が遅れていた、第77回ゴールデン・グローブ賞受賞作をやっと鑑賞。“米中冷戦”が激化し、武漢ウィルス（中国ウィルス？）に対するトランプ大統領のうっ憤が頂点に達している今、ヒロインとして登場するピリーとルル・ワン監督が本作に込めたメッセージをしっかり受け止めたい。

「ウソは泥棒の始まり」だが、他方で「嘘も方便」。また『ライフ・イズ・ビューティフル』（99年）や、『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（99年）を観れば、ウソをつきとおすことの素晴らしさもよくわかる。

他方、ガン告知のあるべき姿は？そこに西欧流と中国流の価値観の相違があるのは当然だが、さあ、愛する“ナイナイ”を巡る、その米中の価値観の衝突の顛末は如何に・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■これは珍しい！実際にあったウソに基づく物語■□■

本作の脚本を書き、監督したのは、1983年に中国の北京で生まれ、アメリカのマイアミで育ち、ボストンで教育を受け、クラシック音楽のピアニストから映画監督に転身した女性ルル・ワン。本作は米「Variety」誌の“2019年に注目すべき監督10人”のひとり選ばれた、そんな彼女の2作目の長編映画だが、全米でわずか4館の公開でのスタートにもかかわらず、大ヒットを記録し、第77回ゴールデン・グローブ賞を受賞した、というからすごい。映画は所詮作り物だが、それでも往々にして、冒頭に「真実に基づく物語」と字幕表示されることがある。ところが、ルル・ワン監督が自分の体験に基づいて脚本も書いた本作は、冒頭部分に、“実際にあったウソに基づく物語”と字幕表示されるから面白い。

そんな字幕の直後に登場するのは、病院の中で電話をしているナイナイ（チャオ・シュウチェン）の姿。どうも彼女は今、検査結果を待ちながら、アメリカに住む孫娘のビリー（オークワフィナ）と電話をしているようだが、病院にいることを隠しているから、それもちょっとしたウソだ。しかし、本作がベースにしている嘘はそんなチャチなウソではなく、医師や家族は患者に対して余命数か月の「がん告知」をするべきか否か、逆に、患者が持つのは、それを知る権利？それとも知らざる権利？そんな大問題にまつわる、大きな嘘だ。

そんなテーマは考え方によっては深刻かつ哲学的な大問題だが、本作はあくまでそれを温かくかつユーモアいっぱいこ・・・。

■□■孫娘の今は？祖母への想いは？■□■

本作冒頭、ニューヨークで暮らすビリーが、歩きながら遠く離れた中国で暮らす祖母ナイナイと電話で話をしている風景が登場する。ビリーは元気がなさそうだが、それは、応募していた学芸員の仕事の不採用になったため。いや、そればかりではない。6歳の時に両親と共にアメリカへ移住したビリーは一生懸命に勉強し、アメリカ流の競争社会を生き抜き、今は実家を出て独立したものの、仕事もなく、家賃すら滞納している、不安っぱいの毎日だったからだ。

そんな中、近くに住む両親の家を訪れると、母親ルー・ジアン（ダイアナ・リン）には娘の近況を心配する雰囲気など全くないばかりか、父親ハイヤン（ツイ・マー）は夕方から床に就いている始末で、どことなく様子がおかしい。そこで「これは何かを隠している」と直感したビリーが母親を問い詰めると、「ナイナイが肺がんの末期だと診断され、余命3か月と宣告された」とのことだった。数日前の電話の時、ナイナイは私に何も言ってなかったのに・・・。その数日後、両親は親戚一同と連絡を取った結果、ビリーの従弟で両親と共に日本に移住したハオハオ（チェン・ハン）が日本で知り合った女性アイコ（水原碧衣）と中国で結婚式を挙げることにした、とナイナイに伝えたが、ナイナイが大好きなビリーはどうすればいいの？

このビリー役を演じて“ゴールデン・グローブ賞主演女優賞”を受賞したオークワフィナがしゃべる中国語は少したどたどしいだけに、逆に中国語初心者の方には聞き取りやすい。他方、ルル・ワン監督は中国語を話せるが、書くことができないそうだから、本作の脚本作りにはいろいろな苦労があったらしい。「プロダクションノート」にはその詳しい顛末が書かれているが、そんな経過もあって、本作のスクリーン上でビリーが喋る中国語は、私にも聞き取りやすいものになっているのかも・・・？

■□■“がん告知”における米中の相違は？互いの価値観は？■□■

最終盤に至ったアメリカ大統領選挙でのトランプ大統領のコロナ罹患騒動にはびっくりだが、それを一番ほくそ笑んでいるのは中国（の習近平国家主席）・・・？選挙戦が進むにつれて、トランプほどの“反中”ではないと思われていた民主党のバイデン候補も、トラ

ンプと競うかのように“反中政策”を次々と打ち出している。菅新総理初の対面方式による外交になった、去る10月6日の「日米豪印、外相会合」では、「インド太平洋連携強化」の大戦略が打ち出されたから、中国もこれには少したじたじ・・・？

それはともかく、米中では民主主義 VS 全体主義の根本的相違はもとより、がん告知のあり方についても、価値観の相違は鮮明。すなわち、西欧流のそれは患者の「知る権利」を重視し、「告知すべき」とするものだが、中国流のそれはあくまで「患者本人には内緒にしておく」ものだ。6歳の時にアメリカに渡り、アメリカ流の教育を受けたビリーは「告知派」だが、両親や親戚は全員「非告知派」らしい。そのため、親戚一同が中国に渡ってナイナイのお見舞い（最後のお別れ？）をするについても、その口実としてハオハオの結婚式を中国で挙げることにしたぐらいだから、やはり中国流のやり方は手が込んでいる。

感情を表に出しがちなビリーを中国に連れていけばヤバイ。そう考えたビリーの両親は、そんな“中国ツアー”からあえてビリーを排除し、ビリーも一度はそれに従っていた。しかし、居ても立っても居られないビリーは、両親のあとを追って、一人で中国へ向かうことに……。両親と大叔母（ルー・ホン）はビリーの来訪に驚いたが、喜んだのはナイナイだ。ナイナイはもちろん自分が肺がんの末期だということを知らないし、ビリー以外の家族全員もそれを隠すための会話をうまく処理していたが、何かと感情を表に出してしまう性格のビリーはどうなの・・・？みんながハラハラしながらビリーの反応を見守る中、ビリーはぎこちないながらも何とかジョークをひねり出していたから一安心。しかし、何も知らずに再会を喜ぶナイナイを見て苦しくなってきたビリーを、伯父のハイビン（ジャン・ヨンポー）はホテルまで送り、繰り返して「病気のことは絶対に本人に言うな」とくぎを刺したが、ビリーはこんなサル芝居（？）をいつまで続けることができるの・・・？

■□■太極拳、結婚式、医師との会話。その中で矛盾が拡大！■□■

中国の結婚式は豪華で、新郎新婦の出身地が異なる場合は、新郎の故郷と新婦の故郷の両方で行うらしい。今回は、日本に移住したハオハオが日本人の女性と式を挙げるものだが、ナイナイが孫の結婚式に向ける熱意は並大抵のものではない。本作では、元気いっぱい朝の太極拳に臨むナイナイの姿が映し出されるうえ、結婚式場の下見に行くナイナイの姿が描かれる。太極拳をビリーに教えるナイナイの姿が元気いっぱいなら、披露宴の打ち合わせで「メニューが違う！」とクレームをつける姿も迫力満点。大勢の親戚や友人を招待した披露宴を成功させるべく、ナイナイは生き生きと元気いっぱいに取り仕切っていた。

ところが、その翌朝、「ナイナイの体調が悪化した」との連絡が入ったからビリーたちはビックリ。家族は直ちに病院に集まったが、そこで興味深いのは、イギリスに留学していたという若いソン医師（ジム・リュウ）とビリーがナイナイにわからないように英語で病状について語り合う風景だ。そこで、「肺ガンが進行している」と説明する医師に対して、ビリーは「本人に知らせなくていいのか」と疑問をぶつけたが、回答は「この状態なら中

国では知らせません。傷つけないための良いウソです。」というものだった。また、場所を変えたところでは、ビリーの父親も「アメリカでは本人に隠すのは違法だ」と大叔母と伯父を責めたが、大叔母は、「ナイナイの夫ががんになった時、ナイナイも死の直前まで黙っていた」と話し、「死期が迫ったら、私から姉さんに言うわ」となだめていた。

本作の「プロダクションノート」には、長春に住んでいた祖母が余命わずかだと診断された後の「ガン告知」についての葛藤が詳しく書かれている。ルル・ワン監督はその体験をもとに本作の脚本を書き、監督したわけだが、本作中盤ではその葛藤ぶりを前述のような形で生々しくぶつけているので、それに注目。なるほど、西欧流と中国流ではここまで違うのか、ということをしかり確認したい。

ナイナイのお見舞い（お別れ？）のため中国に飛んできたビリーだったが、そんなやりとり（サル芝居？）が続く毎日に疲れ果てた挙句、「中国に残ってナイナイの世話をしたい」と母親に相談したが、「そんな思い付きは誰も喜ばないわ」と一蹴されたのは当然。そんな中、ビリーは幼い頃ナイナイと離れて知らない土地に渡り、いかに寂しく不安だったかを涙ながらに母親に訴えたが、ここでビリーが見せる感情の爆発は本作中盤のハイライトだから、そのシーケンスはしかり目に焼き付けたい。

■□■ウソも方便！それはあの名作でも！本作の結末は・・・？■□■

日本ではどの家庭でも、子供たちに「ウソは泥棒の始まり」と教え込むから、子供たちには普通、ウソをつくのは悪いこと、という価値観が徹底される。ところが、少し大人になると、他方で「ウソも方便」と言われるから、少し大人になった子供達の価値観は混乱することに・・・。

本作導入部からのストーリーを見ていると、「ウソは泥棒の始まり」の価値観を持っているうえ、がん告知の在り方について西欧流の価値観を持っているビリーが、家族・親戚一同からナイナイに対して「ウソをつけ」と強要されるしんどさがひしひしと伝わってくる。6歳の時に中国から米国に渡ったため、言葉はもちろん、両国の価値観が混在しているビリーが、そんな状況下で混乱したのは当然だ。

他方、「ウソも方便」を徹底させ、「ウソをつくこと」、さらに「ウソをつき通すこと」が大切なことを教えてくれた名作が「ライフ・イズ・ビューティフル」（99年）（『シネマ1』48頁）と「聖なる嘘つき その名はジェイコブ」（99年）（『シネマ1』50頁）だ。前者は「これはゲームだよ」と父親からウソをつかれた子供が5歳の時だったから、涙を誘うラストシーンまでそのウソを貫き通せたが、ビリーに対してはさすがにそうはいかないから、ビリーは悩み続けることに・・・。今や、ビリーのそんなイライラは頂点に達しつつあるようだが、他方、ナイナイの方は無事に退院し、結婚式の日には元気に出席していたからアレ・・・。トランプ大統領が3日間の入院だけで退院したこと、その後に彼が発信した映像とツイッターの数々には世界中の人々が驚かされたが、本作に見るナイナイの行動力にも、親戚一同はもとより、私はビックリ！結婚式が終われば、ビリーたち家族は米国

へ、ハオハオたち新郎新婦とその両親たちは日本へ、それぞれ帰国することになるが、わざわざ家族そろって中国にやってきた、本来の目的であるナイナイとの「最後のお別れ(?)」はしっかりできたの・・・?そんなテーマを巡る本作の結末はちょっとしゃれているので、それはあなた自身の目でしっかりと!

2020 (令和2) 年10月12日記